



Title	建築家・都市計画家アンリ・プロストによるモロッコ歴史的都市のアーバン・デザイン
Author(s)	三田村, 哲哉
Citation	デザイン理論. 2013, 62, p. 108-109
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/56324
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

建築家・都市計画家アンリ・プロストによるモロッコ歴史的都市の アーバン・デザイン

三田村哲哉／兵庫県立大学

フランスは1830年7月に地中海を挟んで対岸に位置し、その後最も重要な植民地となるアルジェリアの首都アルジェを占領し、1886年6月にチュニジアを保護領に治めて、北アフリカの安定的な支配とさらなる植民地の拡張に成功した。チュニジアというアルジェリアの東側を取ったフランスは、その西に当たるモロッコを手中に収める必要に迫られる。同国とスペインはイギリスとドイツを退けて、1912年3月30日にフェズ協定を、同年11月27日に仏西条約をそれぞれ締結して、両国でモロッコを分割、フランスは同国を正式に保護領にした。

フランスがこれら3国から南進して、さらに植民地を拡張するためには、保護領の安定的な統治、特に主要都市における生活圏の安全が不可欠であり、当時のフランス植民地政策の要のひとつになった。この重要な責務を負ったのがアルジェリア、トンキン（ハノイ）、マダガスカルで実績を上げて、後の1931年パリ植民地国際博覧会（Exposition internationale coloniale à Paris 1931）で賞賛されることとなる初代総督ユベール・リヨテ（Louis-Hubert-Gonzalve LYAUTHEY, 1854-1934）である。

保護領の政治は、統治機構と法の整備から始まり、同年11月にはフランス共和国モロッコ保護領官報が発行された。都市計画や建築はそれから2年ほど遅れることとなる。もともとは、ほか数名とともにフランス都市計画家協会（Société française des urbanistes）を設立した風景画家であり造園家でもある技師ジャン＝クロード＝ニコラ・フォレスティ

エ（Jean-Claude-Nicolas FORESTIER, 1861-1930）が数都市で、すでにいくつかの計画案を描いていた。

これまで一般には、建築家トニー・ガルニエ（Tony GARNIER, 1869-1948）による『工業都市』（1904年）が20世紀フランスの都市計画の萌芽に上げられることが多い。しかし、後にフランス本国およびモロッコやベトナムなどの植民地や保護領の都市計画で功績を残すこととなる建築家や都市計画家らは、第三共和政下において初代理事長アルドベール・ド・シャンブラン伯（Aldebert de Chambrun, 1821-1899）の出資に基づいて創設された社会改良を志すエリート知識人たちによるネットワーク、公益団体「ミュゼ・ソシアル Musée Social」に属して、1908年の都市・農村衛生部会の設立に参画した者たちであり、その中にはフォレスティエのように風景画家もいれば、建築家にはローマ賞受賞者も数多くいた。

そのひとり建築家・都市計画家アンリ・プロスト（Léon Henri PROST, 1874-1959）は、こうしたネットワークを利用して、フォレスティエの後を引き継ぐ形で1914年3月にラバトに到着した。プロストは1902年に同賞を受賞後、1910年アントウェルペン都市圏改造国際設計競技において歴史的街区の保全と新市街の建設を両立するという新たな手法を披露して1等を獲得し、フランス植民地政策の絶頂期に向けてリヨテ総督の下で、1914年から10年間、五大歴史的都市カサブランカ、フェズ、马拉ケシュ、メクネス、ラバトを含む14都市のアーバン・デザインを手がけたのである。

リヨテ総督の保護領政策の一環として実施された都市計画の基本方針は分離政策であり、メディナという原住民のための旧市街を保全しつつ、その外側にヨーロッパ人のための新市街を建設するというものであった。こうした解釈は居住圏に焦点を当てたものであり、これまでの最も一般的な捉え方である。つまり、同国の南方では断続的に戦闘が続いている北側の主要都市において、ヨーロッパ人の安心した生活を保障する生活圏の建設は喫緊の課題であり、原住民のメディナと分離して次々に建設されたのである。

ところがプロストの都市計画を見るとそれだけではない。これらの歴史的都市で実現した都市計画はアントウェルペンに始まり、モロッコの後プロストが手がけることとなるコート・ダジュールの計画案、「パリ地域圏計画」やイスタンブールの都市再生などにおいても採用された歴史主義と、第一次世界大戦前から急速に高まった都市の近代化を両立させるという新たな手法によるものであり、プロストがその姿勢を最初に示した上述のアントウェルペンにおける提案が、モロッコにおいても採用されたのである。こうした手法はしばしばリヨテの分離政策とともに論じられてきたが、フランス共和国モロッコ保護領官報を翻いてみると、メディナのみならず、その外側に位置するヨーロッパを中心としたキリスト教文化圏のものとは異なる建築をはじめとしたモロッコ独自の歴史的・文化的な遺産に関する調査が次々に進められて、それらが本土と同様の歴史的建造物制度(Monuments historiques)に基づいて登録、候補に挙げられていった事実を知ることができる。つまり単に同政策だけでは説明のつかないフランス国家の政策あるいはプロスト独自の方針が垣間見れるのである。換言すれば、こうした建築保全活動は、原住民とヨーロッ

パ人の生活圏を分離するのみにとどまらず、フランスが保護領の歴史・文化を極めて高く尊重していたことを示す確かな証であるとともに、同国がこうした政策を執ったがゆえに、今日我々はモロッコの歴史文化遺産の恩恵を享受できるとも言えるのである。

一方、新市街を形成する多くの近代建築には、当時フランスのみならず、欧米の先進国から南米諸国、さらにはアジア、オセアニアを席巻したアール・デコ様式が取り入れられる場合が多く、モロッコにおいてもカサブランカやラバト、フェズの目抜き通りを中心にこうした建築が次々に建設されて、現在でも林立している。プロストの新たな手法に基づく都市計画がこれらの点で非常に効果的であったがゆえに、こうしたグランド・デザインの必要性を痛感させられるのである。

モロッコにおけるこうした活動は、プロストがちょうど40歳になってからの10年間というごく一部の功績でしかない。その後、イスタンブールのプロジェクトまで歴史に残る数々の偉業をなし得たにもかかわらず、彼に関するモノグラフは死去の翌年に発表された美術史家ルイ・オートクール(Louis HAUTECŒUR, 1884-1973)らによる『アンリ・プロストの作品 建築と都市計画 L'œuvre de Henri Prost, architecture et urbanisme』(1960年)のみにとどまっている。

本研究課題は、プロストの建築・都市の新たな設計手法の解明、フランス近代建築低迷期とされたこの時代の新たな植民地建築史の位置付け、建築を中心とした歴史的・文化的遺産の保全論とその実現という多方面からその成果が期待されている。



アンリ・プロスト（似顔絵）